

hidarimakiの
この逢稀

過去のない男



監督：アキ・カウリスマキ
音楽：アンデロ・キョイラ
クレイジーケンバンド
マコ・ハーヴィスト
ヒダリマキ
キャスト：マルク・ベトラ
ガイ・オディネ
製作：2002年フィンランド
上映：2003年ヨーロッパ
配給：ユーロスペース

20年も昔、20人入れれば超満員になる日本橋の国名小劇場（閉館）で見たカウリスマキ監督の作品「真夜中の虹」で彼のファンになった。どうでもいいことだけれど、「ヒダリマキ」のペンネームはカウリスマキのインスピレーションからだった。演出を感じさせない演出、登場人物たちの無表情さそっけなさに斬新さを感じ、はまってしまった。

「過去のない男」は、野宿する連中を僕が応援し始めた10年前の頃に公開されたが、偶然コンテナハウスに身を寄せる野宿者たちを題材にしていた。同じ頃、白人ラッパー「エミネム」が出演した米映画「8マイル」もコンテナハウスに住む野宿者ラッパーを主人公にしたもので、この頃映画の中でも野宿者たちがハイライトを浴びていた。

カウリスマキの作品には、金や職を失い、権力に追われ、社会から逸脱したり遁走してきた男女たちが常に登場する。つまり困難に立ち向かうというより流されながら浮き沈みする人生を描いてきた。僕らは人間

の強さより弱さに共鳴し、その弱さに自らを重ねて悔いたり悩んだりする。そんな孤独をカウリスマキは「マッチ工場の少女」や「レニングラード・カーボーイ」「白い花びら」など数々の作品で見せてくれた。

曇漢に襲われ頭を強打された男が、コンテナハウスの住人たちに助けられる。しかし自分がどこの誰かさえ分からず警官や役所も門前払いする。彼を援護したのは野宿者や救世軍の連中で、とりわけイルマは名前のない男に「この世は神の力ではなく、自力で生きていくこと」と諭しながらも、男を特別な人と見て愛していく。男は救世軍のバンドのイベントを演出したり、彼らに思返しをする中で自らを回復させていく。

とくにこの映画では音楽が多用されている。ブルース、R&R、クラシック、歌謡曲（クレイジーケンバンドが起用され、なぜか列車の食堂で男が寿司を注文するシーンで流される）が、人生の哀歓や救いを歌い映像を後押しする。とりわけ救世軍のイベントで歌うシワクチャお婆さんの「思い出のモンレポ公園」は素敵で感涙ものだ。また、カウリスマキ作品の常連故マッテイ・ペロンパーの肖像写真が、さりげなくシーンの端っこなどに飾られていてファンを楽しませる。

美男美女は出てこない、大声を出さない、見得を切らないなど映画の虚飾を剥ぎ取りながら、人や風景の愛しさ切なさ、無感動の感動、ヒューマンを語らないヒューマニズムにまたもや魅せられてしまった。男とイルマが踏み切りを渡り終え家路に至るその後ろを、コンテナ列車が通過していくラストシーンは、過去からの脱出をなにげなく見せて「さすが」とうなってしまった。

hidarimaki



あれはもう20年も昔のことだろうか？ボクの部落解放運動の原点とも言えるのが、松岡徹さん（ボクの前任の西成支部の支部長）のひと言だった。その頃、同和対策事業のいわば後進地域だった西成地区には全国から視察者がひっきりなしだった。その視察者を前に彼はこう言った。「我々は見せ物じゃない。視察するなら、ここに対策が遅れた部落があるのではなく、ここで市民の権利が問われていることを見て欲しい。我々は遅れを取り戻そうとしているのじゃない、人間を取り戻そうとしているのだ」。そして、地域の人にはこう呼びかけ続けた。「ある日突然、自分の家の近くに施設が建ち、まちが変わる。ホントにそれでいいのか？この住民は私たちだ」。そして、ボク達は、班集会と言って、たった20人ぐらいの小集会を開いては、地域に起こっている小さな出来事を取り上げ、政治や社会、差別との関係を熱く論じ、そして行動した。

2002年に同和対策法は終結し、2006年5月には飛鳥会事件があり、部落解放運動が「冬の時代」に入って久



差別に反対する営みは社会発展の糧

しい。部落差別は「あるのか、ないのか」が観念論のように論じられ、部落解放同盟の集まりには関古鳥が囂き、地域に起こる出来事を熱く論じることは希有になった。橋下知事の改革がパワフルなことは認めるし、支持率が空前の高さを維持していることもうなづける。同和事業の功罪も認める。しかし、人々は論じること、行動することを手控え、政治の観客席に場所を移そうとしていることを橋下さんは気づいているだろうか。

ボクは、いまに至っても、あの頃の松岡さんの「ここで市民の権利が問われている」という言葉を

糸口に、部落問題とは何か、部落解放運動とは何かを論証できていない。ただ、「差別があるのか、ないのか」に「見せ物じゃない」と反駁し、「何をするのか、しているのか」を対峙させた松岡さんの手腕に、日本の部落問題、部落解放運動を垣間見ている。ボクは、松岡さんに触発されるように、こう言い続けてきた。「差別は社会発展の樹（かせ）だが、差別に反対する営みは、社会発展の種（かて）だ」。

（株）ナイス代表取締役 富田一幸

